



出かけてみました

黄金のパゴダの国ミャンマーとタイの独り旅

会員 大江哲

「えっ、中3日でもビザが要るの?」

結局、1週間ほどでビザは下りましたが、ミャンマー軍事政権の鎖国はまだよやく開かれ始めたばかりなのです。米国議会におけるアウンサン・スーチーさんの活躍により、ミャンマーに対する制裁は解かれ、いろいろな援助が決まりました。

日本のODA援助や中国からミャンマーへ移転してくる日本企業などで、俄かに忙しくなりそうです。

旅行を申込んだ時にはまだそ

んな予見はなく、古都バガン、商都マンダレーと旧ラングーンのヤングンの3都市を、国内航空で1泊ずつする慌ただしい観光の旅を考えただけでした。

現地の日本語ガイドのキン・メイ・ピュー女史は英語の達者な3児の母で、来日留学の経験もあるベテラン。実に細かい気配りをしてくれ、大いに助かりました。

さてミャンマーといえば、第2次大戦中、印緬(インド・ビルマ)戦線で惨敗した日本軍の将兵は、敵の弾に当たって死ぬより餓死の方が多かったと言われるほどの惨状でした。ですから、さぞや、現地のビルマ人からは怨嗟の言葉を聞かされるものと覚悟をしていました。

しかし、かねてお願いしておいたタビンニユ寺院の和尚さんは78歳、優しく手を握ったまま、先祖や戦没精霊の供養をパーリー



老師と戦没者を供養

語の読経でしてくださいました。聞けば旧日本軍の戦没遺族や生き残った兵士たちは、数年前までここへ法要にいられていたようですが、皆さん既に90歳を超えて、とうとうそれも途切れてしまったそうです。用意していった写経やお布施の他、別途お布施を包んで慰霊の供養をお願いしました。

近くにある「鎮魂」、「慰霊」の小さな石碑には下記の墓誌が見られました。

バガン慰霊堂建立之碑

第二次世界大戦において夫々の祖国の為に戦い 一身を捧げた将兵並びに戦火の為に不慮の死を遂げられた多くの人々の霊を慰め 併せて全世界の永遠の平和を願って此の慰霊堂を建立する

1992年8月15日
第33師団戦友遺族の会
並びにミャンマー友好協会

付されたそうです。

因みにミャンマーの仏教はスリランカから伝来の小乗仏教で、袈裟の色は全部一色で階級の違いはないそうです。

さてミャンマーの旅行事情ですが、為替レートは1米ドル＝800キヤット (Kyats) だ、現地

の旅行社が替えてくれましたが、実際は、チップに1000Kyats

(1ドル強) が必要なくらいで、買い物は米ドルでも受け取ってもらえます。

貧乏な子沢山が多く、物乞いが数多くみられるのは日本の敗戦後と同様でしたが、食料が豊富なせいか、人々は明るく、また信心深い人たちでした。外資が入り、産業が興り、仕事が増えれば、勤勉なミャンマー人の生



広い村落にパゴダが散在しているので馬車で遊覧

活レベルも上がり、10年もすれば見違えるようになると思います。ミャンマー語は文法的に日本語と語順も同じで覚えやすく、進出日本企業が現

地人社員を教育するのも楽だと聞きました。

ただ電力が不足しており、鉄道交通、インフラなどはこれから整備が始まります。

10月3日早朝、名残を惜しみながら、ヤンゴン空港からタイ航空機でバンコクに飛びました。

バンコクでは昨年の厦門大学夏季中国語講習の時の級友のカン君、と言っても、86歳の私より66歳も若い法学部の学生さんですが、彼に会うことができました。お父さまは外交官で、現在、香港勤務ですが、お母さん



旧王宮に立つカン君 (バンコク)

と妹さんと3人で毎日、歓待してくれました。しかし、昼食はさみ前後の数時間をご厚意に甘えることとし、あとは部屋で休むことにしました。

バンコクはミャンマーより猛暑で、とても観光する元気は出ませんでした。カン君は弁護士志望で、あと3年勉強を迫られますが、弁護士資格が取れたらカナダのモントリオール級友、イサベラ弁護士と組んで国際法律事務所ができるなどと、楽しい夢を語ってくれました。



イルミネーションに輝く夜のお参り
(マンダレー・シュエパゴダ)